

# 博士學位論文

内容の要旨  
および  
審査の結果の要旨

【第16号】

2010

日本社会事業大学

## はしがき

本編は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条による公表を目的として、平成21年度に本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨および審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第4条第1項(いわゆる課程博士)であり、乙は同条第2項(いわゆる論文博士)によるものであることを示す。

---

目 次

---

[課程博士]

学位記番号	学位の種類	氏 名	論 文 題 目	(頁)
甲第36号	博士(社会福祉学)	長谷部 雅美	高齢者における自伝的記憶の心理的ストレングス としての可能性に関する研究 A study of autobiographical memory functions as psychological-strengths in elderly .....	1

# 博士課程



氏 名 長谷部 雅美

学位の種類 博士 (社会福祉学)

学位記番号 甲第36号

学位記授与の日付 平成22年9月27日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 高齢者における自伝的記憶の心理的ストレングスとしての可能性に関する研究  
A study of autobiographical memory functions as  
psychological-strengths in elderly

論文審査委員

審査委員長 (主査)	日本社会事業大学教授	今井 幸充
審査委員 (副査)	日本社会事業大学教授	大島 巖
審査委員	日本社会事業大学教授	中島 健一
審査委員	日本社会事業大学教授	児玉 桂子
審査委員	日本社会事業大学教授	斉藤 くるみ

今井 幸充	保健福祉系
大島 巖	保健福祉系
中島 健一	介護福祉系
児玉 桂子	社会福祉環境系
斉藤 くるみ	社会参加支援系

高齢者における自伝的記憶の心理的ストレンクスとしての可能性に関する研究  
A study of autobiographical memory functions as psychological-strengths in elderly.

長谷部雅美

Masami Hasebe

社会福祉学研究科 博士後期課程

第1章：研究の意義と研究目的

近年の高齢者に対するソーシャルワークでは、高齢者の問題点や課題だけに注目するのではなく、高齢者が持っている肯定的側面に目を向け、それらを最大限に活用することが求められている。すなわち、高齢者の“チカラ”や“強み”を生かした支援や援助の重要性が高まっていると言える。そこで、本研究では、今日のソーシャルワーク現場で重要視されている「ストレンクス」に着目する。これまでの先行研究や現場での経験的蓄積から、個人に存在する心理面に関わるストレンクス（以下、心理的ストレンクス）には、「自尊心」や「希望（願望）」や「意欲」などがあるとされている（Weick et al., 1989・白澤, 2009）。そこで本研究では、これら既存の心理的ストレンクスに加えて、新たな心理的ストレンクスを発掘すべく、「自伝的記憶（autobiographical memory）」について検討する。自伝的記憶は、「これまでの生活で自分が経験した出来事に関する記憶の総体」（佐藤, 2002）であり、高齢者の多くが持つ個人に存在する資源の一つであると考えられる。もちろん、自伝的記憶の内容によっては「負の資源」となる可能性もあるだろう。しかし、逆に考えれば「正の資源」、すなわち「心理的ストレンクス」となる可能性も大いに秘めているのではないだろうか。そこで、自伝的記憶を新たな「心理的ストレンクス」の一つとして検討することは、非常に重要であると考えられる。

先行研究によると、自伝的記憶の機能には、「自己（Self）」「社会（Social）」「指示（Directive）」という3つがあることが指摘されている（Bluck, 2003）。佐藤（2007）のまとめを引用すると、「自己機能」とは、自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持したりするのに役立つという機能である。また、過去と現在とを対比させることで成長を実感するのに役立つ機能でもある。「社会機能」とは、自伝的記憶が対人関係の形成や維持に役立つ機能である。また、会話の中に自己の経験を挿入することで話の信憑性を高めたり、コミュニケーションを豊かにしたりするという機能でもある。「指示機能」とは、自伝的記憶が様々な判断や行動を方向づけるのに役立つ機能である。すなわち、現在の問題と類似した過去の経験を想起することで、問題解決や将来のプランニングに役立つという機能である。また、過去の経験が人を動機づけたり、態度形成に寄与したりするという機能でもある。しかしながら、これらの先行研究には、高齢者を対象としたものが少ないだけでなく、心理的安定や適応との関連に言及したものも多くはない。すなわち、高齢者の心理的ストレンクスに関わる研究が十分に蓄積されていないのが現状である。一方、自伝的記憶研究と関連性が深い領域である回想研究をみると、回想が高齢者の心理面に及ぼす影響を検討した先行研究は非常に多いと言える（Fly, 1991・Webster, 1993, 1997・野村と橋本, 2001・長田と長田, 1994 など）。ただし、回想研究はあくまでも「回想によってもたらされる効果」を検討することが目的であって、自伝的記憶の質や量が及ぼす影響に

関する研究とは言えないと考える。さらに、自伝的記憶研究でも回想研究でも、高齢者を取り巻く生活環境との関連性を検討したものは、ほとんど見当たらないのが現状である。

そこで、本研究では、高齢者における自伝的記憶の心理的ストレングスとしての可能性を検討するために、以下の3点を目的として設定した。第1に、高齢者がもつ自伝的記憶の特徴を明らかにすることである。これは、研究の第1段階として、高齢者がもつ自伝的記憶に関する基礎的データを収集することが目的である。第2に、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質を明らかにすることである。第3に、生活環境と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連を検討することである。これは言い換えると、生活環境によって「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に違いがあるのかを検討することである。

## 第2章：1次調査により得られた計量的データの分析

### 1. 研究方法

#### 1) 研究の枠組み

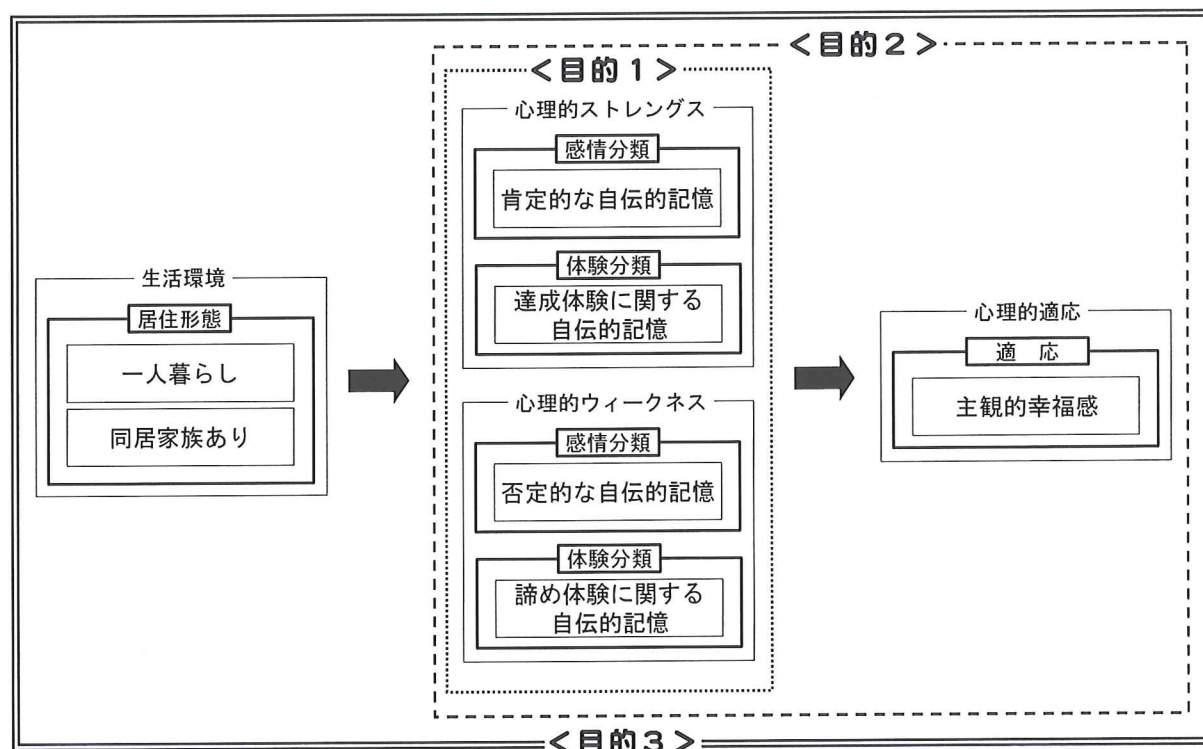
第2章では、目的に従って、以下のような変数間の関連性モデルを設定した(図表1)。

まず、各変数の構成は、以下の通りであった。第1に、自伝的記憶は、認知的側面からみた「感情を伴う自伝的記憶」(感情次元)と実績(行動)的側面からみた「体験に関する自伝的記憶」(体験次元)から構成した。「感情を伴う自伝的記憶」は、斉藤ら(1991)、川元と柴田(2000)、Berntsen & Rubin(2002)の先行研究を参考に、快感情を伴う「肯定的な自伝的記憶」と不快感情を伴う「否定的な自伝的記憶」から構成した。さらに、「肯定的な自伝的記憶」の下位次元には「嬉しい自伝的記憶」と「(誰かに)誇れる自伝的記憶を」、 「否定的な自伝的記憶」の下位次元には「怒り・憎しみの自伝的記憶」と「悲しい自伝的記憶」をそれぞれ設けた。他方、「体験に関する自伝的記憶」は、速水と陳(1993)の先行研究を参考に、「達成体験に関する自伝的記憶」と「諦め体験に関する自伝的記憶」から構成した。第2に、高齢者を取り巻く生活環境については、「居住形態(世帯構造)」を設定した。「居住形態」は、近年の高齢者世帯における典型的な世帯構造となりつつある「一人暮らし」と「同居家族あり」という同居家族の有無による2カテゴリーから構成した。第3に、心理的適応は、心理的に「適応している状態」(プラス面)に着目し、社会老年学の領域において、しばしば高齢者の心理的適応の指標に用いられる「主観的幸福感」から構成した。

続いて、分析枠組みは以下の通りであった。目的1は、高齢者がもつ自伝的記憶の特徴を明らかにすることであった。具体的にはまず、「感情を伴う自伝的記憶」と「体験に関する自伝的記憶」の有無と量の比較をそれぞれ検討した。次に、基本属性(性別・年齢・健康状態・経済状態)と自伝的記憶の量との関連を検討した。目的2は、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質を明らかにすることであった。言い換えると、心理的適応を促進する影響を及ぼす自伝的記憶を明らかにすることである。そこで独立変数には自伝的記憶、従属変数には主観的幸福感を用いて、2タイプの自伝的記憶(感情；肯定的(嬉+誇)・否定的(怒憎+悲)／体験；達成・諦め)が主観的幸福感に及ぼす影響をそれぞれ検討した。なお、目的2では仮説を設けており、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」を心理的ストレングス、「否定的な自伝的記憶」と「諦め体験に関する自伝的記憶」を心理的ウィークネスと位置づけた(図表1)。目的3は、生活環境と「心理的ストレングス」と



なる自伝的記憶の質との関連を検討することであった。すなわち、居住形態(同居家族の有無)によって、「心理的ストレス」となる自伝的記憶の質に違いがあるのかを検討することである。そこで、自伝的記憶を独立変数、心理的適応(主観的幸福感)を従属変数に用いて、「一人暮らし」と「同居家族あり」という居住形態別に、自伝的記憶が主観的幸福感に及ぼす影響を検討した。



図表 1 変数間の関連性モデル (1次調査)

## 2) 1次調査の概要

1次調査は、東京都A市を調査地域として、2008年1月に実施した。調査対象者は、A市の老人クラブ会員で、65歳以上の高齢者340名とした。調査は、質問紙法自記式による集合配布・留置・郵送回収の方法を用いて行った。調査の結果、263票の有効票が得られ、有効回収率は77.4%であった。このうち分析には、性別と年齢に欠測と論理的矛盾のない234票(分析対象率：69.1%)を用いた。

次に、1次調査で測定した変数は、図表2に示す通りであった。第1に、居住形態は、自分を含めた同居家族の人数を尋ねる方法により測定した。第2に、自伝的記憶については、「感情」を伴う自伝的記憶と「体験」に関する自伝的記憶の量をそれぞれ測定した。分析では、マイナスからプラス方向の選択肢順に、「0～5点」に得点化した。第3に、心理的適応では「主観的幸福感」を測定した。主観的幸福感を測定する尺度には、「生活満足度尺度K (LSIK)」(古谷野ら, 1989)を用い、分析では尺度を構成する9項目の合計得点を算出した。第4に、調査対象者の基本属性として、「性別」「年齢」「健康状態」「経済状態」を測定した。

図表2 測定変数の一覧（1次調査）

1. 生活環境	居住形態（世帯構造） ・同居家族の人数
2. 自伝的記憶	1) 感情を伴う自伝的記憶 <sup>1)</sup> (1) 肯定的な自伝的記憶 ①「今でも嬉しくて、思わず笑みがこぼれてしまうような思い出」 ②「今でも胸をはって、誰かに誇れるような思い出」 (が、自分にはある。) (2) 否定的な自伝的記憶 ①「今でも怒りや憎しみが、ふっとわいてくるような思い出」 ②「今でも悲しくて、涙がこぼれてしまうような思い出」 (が、自分にはある。) 2) 体験に関する自伝的記憶 <sup>2)</sup> (1) 達成体験に関する自伝的記憶 ・何かを「やり遂げた」ことや「成し遂げた」こと (2) 諦め体験に関する自伝的記憶 ・何かを途中で「諦めた」ことや「断念した」こと
3. 心理的適応(適応状態)	主観的幸福感 (LSIK,古谷野ら,1989)
4. 対象者の基本属性	1) 性別 2) 年齢 3) 健康状態 <sup>3)</sup> ・全般的にいて、あなたの現在の健康状態は、いかがですか？ 4) 経済状態 <sup>4)</sup> ・あなたの現在の暮らし向きは、全般的にみると、次のどれにあたりますか？

注<sup>1)</sup>:測定には、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6件法のかつ単一回答を用いた。

注<sup>2)</sup>:測定には、「たくさんある」から「まったくない」までの6件法かつ単一回答を用いた。

注<sup>3)</sup>:測定には、「よい」から「よくない」までの5件法のかつ単一回答を用いた。

注<sup>4)</sup>:測定には、「とても余裕がある」から「かなり苦しい」までの5件法のかつ単一回答を用いた。

## 2. 分析結果

### 1) 高齢者をもつ自伝的記憶の特徴（目的1）

第1に、自伝的記憶の有無と量の比較について、選択肢ごとに構成比率(%)を算出した。まず、感情を伴う自伝的記憶では、「肯定的な自伝的記憶」「否定的な自伝的記憶」のどちらにおいても、「ある(嬉:86.5%,誇:75.9%,怒・憎:61.6%,悲:67.7%)」が「ない(嬉:13.5%,誇:24.1%,怒憎:38.4%,悲:32.3%)」を上回っていた。また、3カテゴリー(肯多/同じ/否多)による量の比較では、「肯定的な自伝的記憶の方が多い(64.1%)」割合がもっとも高かった。一方、体験に関する自伝的記憶では、「達成体験に関する自伝的記憶」「諦め体験に関する自伝的記憶」のどちらにおいても、「ある(達:88.3%,諦:69.2%)」が「ない(達:11.7%,諦:30.8%)」を上回っていた。また、3カテゴリー(達多/同じ/諦多)による量の比較では、「達成体験に関する自伝的記憶の方が多い(57.6%)」割合がもっとも高かった。

第2に、基本属性と自伝的記憶との関連を検討した。まず、性別との関連について一元配置分散分析を行った結果、「嬉しい自伝的記憶」「悲しい自伝的記憶」「肯定的な自伝的記憶(嬉+誇)」の平均得点において、統計学的に有意な性差が認められた。すなわち、女性の方がこれらの自伝的記憶の量が多いという結果であった。次に、年齢との関連について相関係数を算出した結果、「諦め体験に関する自伝的記憶(-.187)」との間においてのみ、

統計学的に有意な「負」の相関関係が認められた。すなわち、年齢が高くなるほど、「諦め体験に関する自伝的記憶」の量が減少するという結果であった。続いて、健康状態と経済状態との関連について変相関分析(統制変数：性別・年齢)を行った結果、「否定的な自伝的記憶(健康：-.169, 経済：-.158)」と「達成体験に関する自伝的記憶(健康：.262, 経済：.200)」との間で、統計学的に有意な相関関係が認められた。すなわち、健康・経済状態が良好であるほど、「否定的な自伝的記憶」の量が減少し、「達成体験に関する自伝的記憶」の量が増加するという結果であった。

## 2) 心理的ストレングスとなる自伝的記憶の質(目的2)

第1に、感情を伴う自伝的記憶が、心理的適応(主観的幸福感)に及ぼす影響について重回帰分析を行った結果、統計学的に有意なプラスの影響を及ぼしていなかった。言い換えると、「肯定的な自伝的記憶」と「否定的な自伝的記憶」は共に、心理的適応を促進する影響を及ぼしていないという結果であった。すなわち、「『肯定的な自伝的記憶』は心理的ストレングスとなる」という仮説は支持されなかった。

第2に、体験に関する自伝的記憶が、心理的適応(主観的幸福感)に及ぼす影響について重回帰分析を行った結果、「達成体験に関する自伝的記憶」が統計学的に有意なプラスの影響を及ぼしていた(図表3)。言い換えると、「達成体験に関する自伝的記憶」の量が多くなるほど、主観的幸福感が高まるという結果であった。すなわち、「達成体験に関する自伝的記憶」が心理的適応を促進させる影響を及ぼしていたことから、「『達成体験に関する自伝的記憶』は心理的ストレングスとなる」という仮説は支持された。

図表3 達成体験に関する自伝的記憶が主観的幸福感に及ぼす影響<sup>1)2)</sup>

(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数( $\beta$ )
	主観的幸福感
性別	.061
年齢	-.093
健康状態	.400***
経済状態	.136*
達成体験に関する自伝的記憶	.231***
決定係数( $R^2$ )	.343***

注1)：表中には、標準偏回帰係数( $\beta$ )を示した。

注2)：観測有意水準は、以下の略記号により示した。

\* ;  $p < .05$     \*\*\* ;  $p < .001$

## 3) 居住形態と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連(目的3)

第1に、居住形態(同居家族の有無)別にみた「肯定的な自伝的記憶」が、心理的適応(主観的幸福感)に及ぼす影響を検討した結果、同居家族の有無という居住形態の違いは関連していなかった。言い換えると、一人暮らしであっても家族と同居していても、「肯定的な自伝的記憶」は、全体での分析結果と同様に心理的適応を促進していなかった。このことか



ら、居住形態という生活環境の違いによって、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に違いはないことが明らかとなった。

第2に、居住形態(同居家族の有無)別にみた「達成体験に関する自伝的記憶」が、心理的適応(主観的幸福感)に及ぼす影響を検討した結果を図表4に示した。分析の結果、居住形態による違いが認められ、「同居家族あり」では、「達成体験に関する自伝的記憶」が「主観的幸福感」に対して、統計学的に有意なプラスの影響を及ぼしていたのに対し、「一人暮らし」では統計学的に有意な影響を及ぼしていなかった。言い換えると、家族と同居する高齢者の場合のみ、「達成体験に関する自伝的記憶」が、心理的適応を促進する影響を及ぼしていた。このことから、一人暮らし高齢者の場合は、達成体験に関する自伝的記憶が「心理的ストレングス」にはなっていないが、家族と同居する高齢者の場合は、「心理的ストレングス」になっていることが明らかとなった。

図表4 居住形態別にみた「達成体験に関する自伝的記憶」が主観的幸福感に及ぼす影響<sup>1)2)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数( $\beta$ )	
	主観的幸福感	
	一人暮らし	同居家族あり
性別	.210	.044
年齢	-.097	-.086
健康状態	.472**	.386***
経済状態	.109	.161*
達成体験に関する自伝的記憶	.194	.224**
決定係数( $R^2$ )	.425**	.317***

注1)：表中には、標準偏回帰係数( $\beta$ )を示した。

注2)：観測有意水準は、以下の略記号により示した。\*； $p<.05$  \*\*； $p<.01$  \*\*\*； $p<.001$

### 第3章：2次調査により得られた計量的データの分析

#### 1. 研究方法

##### 1) 研究の枠組み

第3章における変数間の関連性モデルは、追加した変数を除き、第2章と同じである。

各変数の構成は、1次調査とほぼ同じであった。2次調査では、高齢者を取り巻く生活環境として、生活環境のソフト面にも注目し、「ソーシャル・サポート」(他者からの関わり；受動的側面)と「社会との関わり」(自分からの関わり；能動的側面)を設定した。「ソーシャル・サポート」は、野口(1991)を参考に、「手段的サポート」と「情緒的サポート」の受領頻度から構成した。「社会との関わり」については、「(必要に迫られての)日用品の買出し」「(個人の希望による)趣味や遊び」「(個人の希望かつ責任が生じる)地域での活動」といった用事で外出する頻度から構成した。また、心理的適応に関しては、適応状態(プラス面)に加えて、不適応状態(マイナス面)の両面から構成した。適応状態には、1次調査と同様に「主観的幸福感」を用い、不適応状態には「抑うつ」を用いた。

分析枠組みは、1次調査と同様であった。なお、新たに追加した生活環境に関しては、ソーシャル・サポート(手段・情緒)では「少受領群」と「多受領群」という多寡別、社会との関わり(日用品買出し・趣味や遊び・地域での活動)では「低頻度群」と「高頻度群」という頻度別に、自伝的記憶が心理的適応(主観的幸福感・抑うつ)に及ぼす影響を検討した。

## 2) 2次調査の概要

2次調査では、1次調査において不十分であった高齢者の生活環境(ソーシャル・サポート、社会との関わり)と心理的適応(不適応状態;抑うつ)について、より詳細に検討することを目的とした。調査は、東京都B区を調査地域として、2009年6月に実施した。調査対象者は、1次調査と同じく、B区の老人クラブ会員で、65歳以上の高齢者800名とした。調査は、質問紙法自記式による集合配布・留置・郵送回収の方法を用いて行った。調査の結果、523票の有効票が得られ、有効回収率は65.4%であった。このうち分析には、性別と年齢の設問に欠測や論理的矛盾のない485票(分析対象率:60.6%)を用いた。

なお、2次調査で測定した変数は、以下の図表5にまとめて示した。ソーシャル・サポートは、日々の生活でのサポート受領量について、「よくあった」から「まったくなかった」までの6件法を用いて測定した。分析では、受領量が多くなるほど高得点になるよう「0～5点」に得点化した。社会との関わりは、目的別の外出がどの程度あったか(頻度)について、「ほぼ毎日」から「まったくない」までの9件法により測定した。分析では、外出頻度が高いほど高得点になるよう「0～9点」に得点化した。抑うつを測定する尺度には、「老人用うつスケール(GDS)短縮版(矢富,1994)」を用いた。分析では、尺度を構成する15項目について、抑うつ度が高いほど高得点となるように合計得点を算出した。

図表5 測定変数の一覧(2次調査)

1. 生活環境	1) 居住形態(世帯構造) ・同居家族の人数 2) ソーシャル・サポート <sup>1)</sup> (1) 手段的サポートの受領頻度 ・日々の生活で、ちょっとした用事やおつかいをしてもらうことは? (2) 情緒的サポートの受領頻度 ・日々の生活で、誰かと一緒にいて「ほっとする」ことは? 3) 社会との関わり <sup>2)</sup> (1) 「日用品の買出し」による外出頻度 ・スーパーへの食料品の買出しなど、日常生活の買い物で外出すること (2) 「趣味や遊び」による外出頻度 ・趣味や遊びで外出すること (3) 「地域での活動」による外出頻度 ・地域の「寄り合い」や「頼まれごと」などで外出すること
2. 自伝的記憶	1次調査と同様
3. 心理的適応	1) 適応状態 (1) 主観的幸福感(LSIK, 古谷野ら, 1989) 2) 不適応状態 (1) 抑うつ(GDS短縮版, 矢富, 1994)
4. 対象者の基本属性	1次調査と同様

注<sup>1)</sup>:測定には、「よくあった」から「まったくなかった」までの6件法かつ単一回答を用いた。

注<sup>2)</sup>:測定には、「ほぼ毎日」から「まったくない」までの9件法かつ単一回答を用いた。



## 2. 分析結果

### 1) 高齢者がもつ自伝的記憶の特徴 (目的1)

第1に、自伝的記憶の有無と量の比較について、選択肢ごとに構成比率(%)を算出した結果は、1次調査とほぼ同様であった。

第2に、基本属性との関連については、以下の通りであった。まず、性別との関連では、1次調査と同様の結果が認められ、女性は男性に比べて、感情を伴う自伝的記憶の量が、統計学的に有意に(有意な傾向も含む)多いという結果であった。次に、年齢との関連について相関係数を算出した結果、「達成体験に関する自伝的記憶(-.115)」との間においてのみ、統計学的に有意な「負」の相関関係が認められた。すなわち、年齢が高くなるほど、「達成体験に関する自伝的記憶」の量が減少するという結果であった。続いて、健康状態と経済状態との関連について変相関分析(統制変数：性別・年齢)を行った結果、ほぼすべての自伝的記憶との間で、統計学的に有意な相関関係が認められた。まとめると、健康・経済状態が良好であるほど、「肯定的な自伝的記憶」の量が増加すると共に、「否定的な自伝的記憶」の量は減少し、「達成体験に関する自伝的記憶」の量が増加すると共に、「諦め体験に関する自伝的記憶」の量が減少するという結果であった。

### 2) 心理的ストレングスとなる自伝的記憶の質 (目的2)

「感情」を伴う自伝的記憶と「体験」に関する自伝的記憶が、心理的適応(主観的幸福感・抑うつ)に及ぼす影響について重回帰分析を行った結果、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が統計学的に有意な影響を及ぼしていた(図表6・7)。影響の向きは、主観的幸福感を高め・抑うつを低下させるものであった。すなわち、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が心理的適応を促進(心理的不適応を緩和)させる影響を及ぼしているという結果であった。これらの結果から、『肯定的な自伝的記憶』と『達成体験に関する自伝的記憶』は心理的ストレングスとなる」という仮説は支持された。

図表6 肯定的な自伝的記憶が心理的適応に及ぼす影響<sup>1)3)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数( $\beta$ )	
	主観的幸福感	抑うつ
性別	.041	-.007
年齢	-.087*	.071*
健康状態	.404***	-.347***
経済状態	.308***	-.164***
肯定的な自伝的記憶 <sup>2)</sup>	.122**	-.162***
決定係数( $R^2$ )	.386***	.245***

注1)：表中には、標準偏回帰係数( $\beta$ )を示した。

注2)：肯定的な自伝的記憶は、嬉しい記憶と誇れる記憶の合計得点とした。

注3)：観測有意水準は、以下の略記号により示した。\*； $p < .05$  \*\*； $p < .01$  \*\*\*； $p < .001$

図表7 達成体験に関する自伝的記憶が心理的適応に及ぼす影響<sup>1)3)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数(β)	
	主観的幸福感	抑うつ
性別	.037	.003
年齢	-.065	.040
健康状態	.387***	-.293***
経済状態	.289***	-.129**
達成体験に関する自伝的記憶	.182***	-.308***
決定係数(R <sup>2</sup> )	.408***	.305***

注<sup>1)</sup>: 表中には、標準偏回帰係数(β)を示した。

注<sup>2)</sup>: 観測有意水準は、以下の略記号により示した。 \*\*; p<.01 \*\*\*; p<.001

### 3) 生活環境と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連 (目的3)

#### (1) 居住形態との関連

第1に、居住形態別にみた「肯定的な自伝的記憶」が、心理的適応(主観的幸福感・抑うつ)に及ぼす影響を検討した結果を図表8に示した。分析の結果、居住形態による違いが認められ、「同居家族あり」では、「肯定的な自伝的記憶」が「主観的幸福感」と「抑うつ」に対して、統計学的に有意な影響を及ぼしていたのに対し、「一人暮らし」では統計学的に有意な影響を及ぼしていなかった。言い換えると、家族と同居する高齢者の場合のみ、「肯定的な自伝的記憶」が、心理的適応を促進(不適応を緩和)する影響を及ぼしていた。このことから、家族と同居する高齢者の場合は、「心理的ストレングス」になっていることが明らかとなった。

第2に、「達成体験に関する自伝的記憶」においても同様の結果が認められた。すなわち、家族と同居する高齢者において、「心理的ストレングス」となっていた。

図表8 居住形態別にみた肯定的な自伝的記憶が心理的適応に及ぼす影響<sup>1)3)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数(β)			
	主観的幸福感		抑うつ	
	一人暮らし	同居家族あり	一人暮らし	同居家族あり
性別	.188*	.012	-.054	-.004
年齢	.009	-.121**	.168	.057
健康状態	.431***	.414***	-.423***	-.339***
経済状態	.286**	.309***	-.067	-.185***
肯定的な自伝的記憶 <sup>2)</sup>	-.098	.175***	-.089	-.182***
決定係数(R <sup>2</sup> )	.381***	.408***	.305***	.241***

注<sup>1)</sup>: 表中には、標準偏回帰係数(β)を示した。

注<sup>2)</sup>: 肯定的な自伝的記憶は、嬉しい記憶と誇れる記憶の合計得点とした。

注<sup>3)</sup>: 観測有意水準は、以下の略記号により示した。 \*; p<.05 \*\*; p<.01 \*\*\*; p<.001

## (2) ソーシャル・サポートとの関連

分析の結果、「情緒的サポート」受領量の多寡によって、「肯定的な自伝的記憶」が心理的適応(主観的幸福感・抑うつ)に及ぼす影響が異なっていた。詳述すると、「多受領群」において、「肯定的な自伝的記憶」が「主観的幸福感」と「抑うつ」に対して、統計学的に有意な影響を及ぼしていたのに対し、「少受領群」では統計学的に有意な影響を及ぼしていなかった。言い換えると、情緒的サポート受領量が多い高齢者では、「肯定的な自伝的記憶」が、心理的適応を促進(不適応を緩和)する影響を及ぼしていた。このことから、情緒的サポート受領量が多い高齢者の場合は、「心理的ストレングス」になっていることが明らかとなった。

第2に、「達成体験に関する自伝的記憶」においても同様の結果が認められた(図表9)。すなわち、情緒的サポート受領量が多い高齢者において、「達成体験に関する自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となっていた。

図表9 情緒的サポートの多寡別にみた達成体験に関する自伝的記憶が心理的適応に及ぼす影響<sup>1)3)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数 ( $\beta$ )			
	主観的幸福感		抑うつ	
	少受領群	多受領群	少受領群	多受領群
性別	.135	.026	-.008	.004
年齢	-.045	-.060	.019	.046
健康状態	.512***	.379***	-.346*	-.272***
経済状態	.162	.324***	-.221	-.116*
達成体験に関する自伝的記憶	.018	.189***	-.090	-.348***
決定係数 ( $R^2$ )	.354**	.426***	.261*	.312***

注<sup>1)</sup>: 表中には、標準偏回帰係数( $\beta$ )を示した。

注<sup>2)</sup>: 観測有意水準は、以下の略記号により示した。 \*;  $p < .05$  \*\*;  $p < .01$  \*\*\*;  $p < .001$

## (3) 社会との関わり (外出頻度) との関連

分析の結果、「趣味・遊び」と「地域での活動」を目的とした外出頻度の高低によって、「肯定的な自伝的記憶」が心理的適応に及ぼす影響が異なっていた(図表10)。詳述すると、「低頻度群」において、「肯定的な自伝的記憶」は主観的幸福感と抑うつに対し、統計学的に有意な影響を及ぼしていた。すなわち、「趣味・遊び」「地域での活動」による外出低頻度群では、「肯定的な自伝的記憶」が心理的適応を促進しているという結果であった。以上のことから、「肯定的な自伝的記憶」は外出低頻度群においては「心理的ストレングス」となるが、高頻度群ではならないということが明らかとなった。つまり、「社会との関わり」(趣味・遊び、地域活動)の程度という生活環境の違いによって、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に違いがあることが明らかとなった。



図表 10 趣味・遊びによる外出頻度の高低別にみた肯定的な自伝的記憶が心理的適応に及ぼす影響<sup>1)3)</sup>  
(重回帰分析の結果の要約)

独立変数	従属変数 (β)			
	主観的幸福感		抑うつ	
	低頻度群	高頻度群	低頻度群	高頻度群
性別	.068	-.022	.039	-.098
年齢	-.094	-.046	.074	.059
健康状態	.429***	.352***	-.316***	-.371***
経済状態	.303***	.321***	-.219***	-.045
肯定的な自伝的記憶 <sup>2)</sup>	.121*	.108	-.210***	-.085
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.388***	.339***	.263***	.185***

注<sup>1)</sup>: 表中には、標準偏回帰係数(β)を示した。

注<sup>2)</sup>: 肯定的な自伝的記憶は、嬉しい記憶と誇れる記憶の合計得点とした。

注<sup>3)</sup>: 観測有意水準は、以下の略記号により示した。\* ; p<.05 \*\*\*; p<.001

#### 第 4 章 : 分析結果の考察

##### 1. 高齢者がもつ自伝的記憶の特徴

第 1 に、高齢者がもつ自伝的記憶の特徴として、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」は記憶に残り易いが、「否定的な自伝的記憶」と「諦め体験に関する自伝的記憶」は記憶に残りにくい可能性が示唆された。これらの結果は、高齢になると若い時期に比べて、ポジティブな経験を多く想起し、ネガティブな経験をそれほど想起しなくなるという「高齢者におけるポジティブ効果」(Kennedy et al., 2004) の存在を支持するものであると考えられる。

第 2 に、「感情を伴う自伝的記憶」において性差が認められ、女性は男性に比べて、「嬉しい自伝的記憶」と「悲しい自伝的記憶」をより多く持っていることが明らかとなった。これらの結果から、女性は男性に比べて、快・不快に関わらず、感情を伴う自伝的記憶が記憶に残りやすい、もしくは想起されやすい可能性が示唆された。こうした女性の傾向は、先行研究においても確認されている(Seidlitz & Dimer, 1998)。ただし、本研究の結果、「誇れる自伝的記憶」と「怒り・憎しみの自伝的記憶」では、こうした性差が認められなかったことから、先行研究の結果を全面的に支持するものではない。

第 3 に、健康状態と経済状態が良好であるほど、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」の量が多くなり、逆に悪くなるほど、「否定的な自伝的記憶」と「諦め体験に関する自伝的記憶」の量が多くなる可能性が示唆された。このことから、健康状態と経済状態が良好であると、自分の望むことを比較的実現しやすくなり、結果として、「肯定的な自伝的記憶」や「達成体験に関する自伝的記憶」の蓄積に結びつく可能性が考えられる。一方、健康状態と経済状態が悪いと、様々な場面で制限や障害が生じることから、結果として「否定的な自伝的記憶」や「諦め体験に関する自伝的記憶」の蓄積に結びつくのかもしれない。

##### 2. 心理的ストレングスとなる自伝的記憶の質

「肯定的な自伝的記憶」について、1次調査では「心理的ストレングス」とはなってい

なかったのに対して、2次調査では、適応状態(主観的幸福感)を促進するだけでなく、不適応状態(抑うつ)も緩和する「心理的ストレングス」となっていることが明らかとなった。このような異なる分析結果から、統一された結論を出すことは、現時点では難しいと考える。しかしながら、経験的にみれば、高齢者にとって心地のよい思い出が、心の安定を保つという可能性は、十分に推測されることである。よって、「肯定的な自伝的記憶」の心理的ストレングスとしての可能性について、今後更なる分析を重ねることが必要であろう。

他方、達成体験に関する自伝的記憶は、適応状態を促進し、不適応状態も緩和する「心理的ストレングス」となっていることが示唆された。この点に関しては、自分の成功体験に関する自伝的記憶が、最も中心的な動機づけ機能の役割を果たしていることを指摘する先行研究がある(速水と陳, 1993)。すなわち、成功体験の記憶が新たな行動を起こす際のモチベーションとなっているのである。この先行研究の対象者は高齢者ではないが、成功体験や達成体験の記憶が少なからず、何かをするための意欲を生み出す源となっていることは容易に想像できる。つまり「達成体験に関する自伝的記憶」が高齢者にとって日常生活を生きる原動力の一つとなっている可能性が考えられる。重回帰分析の結果、「達成体験に関する自伝的記憶」が「肯定的な自伝的記憶」に比べて、心理的適応に対して全体的に強い影響を及ぼしていたのも、「達成体験」という記憶の質がもつ動機づけ機能や原動力があるからなのかもしれない。よって、嬉しいとか誇れるといった快感情を伴う自伝的記憶よりも、何かを達成した体験に関する自伝的記憶の方が、より強固な「心理的ストレングス」となっている可能性が考えられる。

### 3. 生活環境と心理的ストレングスとなる自伝的記憶の質との関連

第1に、一人暮らし高齢者において、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となっていなかったという結果(2次調査)に注目すべきであると考えられる。こうした結果から考察されるのは、一人暮らし高齢者は、快感情を伴う自伝的記憶を多く持っていたとしても、何らかの要因によって、それが心の安定につながりにくいということである。または、過去のよい出来事ではない、他の何かによって、心の安定を図っている可能性も考えられる。一方、家族と同居する高齢者の場合は、「肯定的な自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となっていることから、過去のよい出来事の記憶を、積極的に想起するよう促す支援の方向性が考えられる。

第2に、他者からの十分な情緒的サポートの存在が、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」を「心理的ストレングス」にしている可能性が示唆された。このことは、心が休まる人と共有する時間やそこでのコミュニケーションが、「心理的適応」を促進させるような自伝的記憶の生成に関連している可能性も考えられる。

第3に、趣味や遊び、地域活動による外出頻度が高い高齢者では、快感情を伴う自伝的記憶であっても、「心理的ストレングス」とはならないことが明らかとなった。この結果から、趣味や遊びによる外出が多い人は、過去の出来事ではなく、現在進行中の取り組みや活動、またはそれらを通じた人間関係などが、心理的な支えとなっていることが推測される。一方、低頻度群から考察すると、「肯定的な自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となるのは、外出機会が少ないからこそ働く心理機制であると考えられる。言い換えると、「趣味・遊び」「地域活動」といった自分の希望や意志を実現できるような社会との関わり



が少ないことにより，“外側”での新たなポジティブ体験が相対的に少ない高齢者においては，そうでない高齢者（高頻度群）以上に，“内側”のポジティブ体験（“よい思い出”）が，より強く心理的適応を促進しているということである。

## 第5章：総合的な考察

### 1. 「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質と生活環境との関連についてのまとめ

第1に，全体からみた「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質では，「肯定的な自伝的記憶」（更なる検討が必要であるが）と「達成体験に関する自伝的記憶」が，高齢者にとって，心理的適応を促進する“強み”と心理的不適応を緩和する“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第2に，居住形態と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では，家族と同居する高齢者において，「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が，適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第3に，ソーシャル・サポートと「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では，情緒的サポートでは，多受領群において，「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が，適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第4に，社会との関わりと「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では，趣味や遊びによる外出と地域での活動による外出では，低頻度群において，「肯定的な自伝的記憶」が，適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

### 2. 本研究の結果を踏まえた介入(実践)への提案

第1に，達成体験に関する自伝的記憶の活性化が考えられる。本研究の結果，「達成体験に関する自伝的記憶」が「肯定的な自伝的記憶」よりも強い「心理的ストレングス」となっており，高齢者の心理的適応に貢献している可能性が示唆された。そこで，高齢者に対する具体的な支援方法として，グループ回想法におけるテーマ設定が考えられる。すなわち，グループ回想法において，「私がやり遂げたこと」というテーマを設定するのである。そして，積極的に自分の達成体験を想起し，意識化するのである。また，回想法という改まった場面だけでなく，高齢者との日常的なコミュニケーションの中でも，意識化するような働きかけ（言葉かけなど）は可能であろう。

第2に，情緒的サポートの受領を通じた「心理的ストレングス」の強化が考えられる。「誰かと一緒にいて心がほっとする」ことが頻繁にある群では，「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となっている可能性が示唆された。また，情緒的サポート受領量とこれらの自伝的記憶の量は，「正」の相関関係にあることが明らかになっている。このことから，心が休まる人と共有する時間やそこでのコミュニケーションが，心理的適応を促進させる自伝的記憶の生成もしくは意識化に関連していることが推察される。以上のことから，情緒的サポートは，自伝的記憶が「心理的ストレングス」となる上で，プラスの効果をもつことが考えられる。そこで，援助者には，高

齢者に対して、情緒的サポートを受領できる（心がほっとできる）他者を、得られるような支援が求められると考える。例えば、家族との関係性で困難を抱えている場合には、その解決が重要であろうし、新たな人間関係の構築を願っているのであれば、それが実現できるよう手助けすることが必要であろう。

第3に、自らの希望に基づく「社会との関わり」が少ない高齢者における自伝的記憶の活用があげられる。本研究の結果、「趣味や遊び」「地域活動」による外出機会が少ない高齢者において、「肯定的な自伝的記憶」が「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。このことから、何らかの理由で自宅に居ることが多い高齢者においては、地域社会での新たな体験が少ない分、これまでのよい体験や出来事に関する自伝的記憶が、より強固な「心理的ストレングス」になっていることが推測される。このことから、社会との関わりが希薄な高齢者への支援では、“よい思い出”を高齢者が有する重要な内的資源の一つとして捉える視点が必要だと思われる。

## 引用文献

- Bernsten,D., & Rubin,D.C.(2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span;The recall of happy, sad, traumatic, and involuntary memories. *Psychology and Aging*, 17, 636-652.
- Bluck,S.(2003). Autobiographical memory ; Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11(2), 113-123.
- Fly,P.S.(1991). Individual differences on reminiscence among older adults ; Predictors of frequency and pleasantness ratings of reminiscence activity. *International Journal of Aging and Human Development*, 33, 311-326.
- 速水敏彦・陳恵貞(1993). 動機づけ機能としての自伝的記憶. 名古屋大学教育學部紀要, 教育心理学科, 40, 89-98.
- 川元克秀・柴田博(2000). 否定的思い出の有無が高齢者の生きがい感に及ぼす影響の ADL レベルによる相違. 第3回日本老年行動科学学会大会要旨, 62-63.
- Kennedy,Q., Mather,M., & Carstensen,L.L.(2004). The role of motivation in the age-related positivity effect in autobiographical memory. *Psychological Science*, 15, 208-214.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男(1989). 生活満足度尺度の構造；主観的幸福感の多次元性とその測定. *老年社会科学*, 11, 99-125.
- 野口裕二(1991). 高齢者のソーシャルサポート；その概念と測定. *社会老年学*, 34, 37-48.
- 野村信威・橋本幸(2001). 老年期における回想の質と適応との関連. *発達心理学研究*, 12(2), 75-86.
- 長田由紀子・長田久雄(1994). 高齢者の回想と適応に関する研究. *発達心理学研究*, 5(1), 1-10.
- 齋藤洋典・中村信次・鬼頭孝通・藤本卓也(1991). 自伝的記憶(I)；連想記憶における想起事象の感情分類. *日本心理学会第55回大会発表論文集*, 343.
- 佐藤浩一(2002). 自伝的記憶. 『日常認知の心理学(井上毅・佐藤浩一編著)』, 北大路書房, 70-87.
- 佐藤浩一(2007). 自伝的記憶の機能と想起特性. 群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編), 56, 333-357.
- Seidlitz,L., & Diener,E.(1998). Sex differences in the recall of affective experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(1), 262-271.
- 白澤政和(2009). 『ストレングスモデルのケアマネジメント(白澤政和編著)』, ミネルヴァ書房.
- Webster,J.D.(1993). Construction and validation of the reminiscence functions scale. *Journal of Gerontology*, 48(5), 256-262.
- Webster,J.D.(1997). The reminiscence functions scale ; A replication. *International Journal of Aging and Human Development*, 44(2), 137-148.
- Weick,A., Rapp,C.A., Sullivan,W.P., & Kisthardt,W.(1989). A Strengths Perspective for Social Work Practice, *Social Work*, 34(4), 350-354.
- 矢富直美(1994). 日本老人における老人用うつスケール(GDS)短縮版の因子構造と項目特性の検討. *老年社会科学*, 16(1), 29-36.

(アルファベット順)

# 審査結果の要旨

## I 論文の構成と内容

### 【論文表題】

表題：高齢者における自伝的記憶の心理的ストレングスとしての可能性に関する研究

### 【論文の構成】

本論文は、「高齢者における自伝的記憶の心理的ストレングスとしての可能性に関する研究」をテーマに実施した研究の報告である。この研究論文は、内外の先行研究を数多く総説した後に研究の意義や目的を示し、研究仮説を立て、その検証のため2つの調査を実施し、統計分析から仮説検証の結果を考察した論文である。論文の構成は、以下のように5章からなる。

第1章「研究の意義と研究目的」は、研究の背景、先行研究、研究の意義と目的、キーワードの定義の4節から構成されている。この第1章は主に研究目的を示し、研究仮説構築の根拠を明らかにする事を目的にしている。

第2章「1次調査により得られた計量的データの分析」と第3章「2次調査により得られた計量的データの分析」では、2つの調査の目的、方法、結果、考察をそれぞれの章で述べている。

第4章「分析結果の考察」では、第1節で地域高齢者が持つ自伝的記憶の特徴、第2節で「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に関する考察、第3節で生活環境と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に関する考察を行い、第5章「総合的な考察」で本研究の総括を行っている。

### 【論文の内容】

本研究は、高齢者の「自伝的記憶 (autobiographical memory)」が新たな心理的ストレングスとしての可能性を検討するために、第1に高齢者がもつ自伝的記憶の特徴を明らかにする、第2に「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質を明らかにする、第3に生活環境と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連を検討することを目的とした。

1次調査は、東京都A市の老人クラブ会員340名を対象に質問紙法自記式によるアンケート調査を実施し、有効回収率は77.4%であった。結果では、高齢者の自伝的記憶の特徴として、女性の方が自伝的記憶の量が多く、年齢が高くなるほど、「諦め体験に関する自伝的記憶」の量が減少する結果であった。健康状態と経済状態との関連については、健康・経済状態が良好であるほど「否定的な自伝的記憶」の量が減少し、「達成体験に関する自伝的記憶」の量が増加するという結果であった。また、『肯定的な自伝的記憶』は心理的ストレングスとなる」という仮説は支持されなかったが、達成体験に関する自伝的記憶は心理的ストレングスとなることは支持された。そして、一人暮らし高齢者の場合は、達成体験に関する自伝的記憶が「心理的ストレングス」にはなっていなかったが、家族と同居する高齢者の場合は、「心理的ストレングス」になっていることが明らかとなった。

2次調査では、1次調査において不十分であった高齢者の生活環境と心理的適応について、より詳細に検討することを目的とした。調査対象者は、東京都B区の老人クラブ会員800名で、質問紙法自記式による調査を行い、有効回収率は65.4%であった。結果は、情緒的サポート受領量が多い高齢者では、「肯定的な自伝的記憶」が心理的適応を促進する影響を及ぼしていた。このことから、情緒的サポート受領量が多い高齢者の場合は、「心理的ストレングス」になっていることが明らかとなった。



また「達成体験に関する自伝的記憶」においても、情緒的サポート受領量が多い高齢者において、心理的ストレングスとなっていた。そして「社会との関わり」（趣味・遊び、地域活動）などの生活環境の違いによって、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質に違いがあることが明らかとなった。

以上から、以下の事が明らかになった。

第1に、肯定的な自伝的記憶と「達成体験に関する自伝的記憶」が、高齢者にとって、心理的適応を促進する“強み”と心理的不適応を緩和する“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第2に、居住形態と「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では、家族と同居する高齢者において、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が、適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第3に、ソーシャル・サポートと「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では、情緒的サポートでは、多受領群において、「肯定的な自伝的記憶」と「達成体験に関する自伝的記憶」が、適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

第4に、社会との関わりと「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質との関連では、趣味や遊びによる外出と地域での活動による外出では、低頻度群において、「肯定的な自伝的記憶」が適応促進と不適応緩和の“強み”をもった「心理的ストレングス」となり得る可能性が示唆された。

本研究結果から、「達成体験に関する自伝的記憶」が「肯定的な自伝的記憶」よりも強い「心理的ストレングス」となり、高齢者の心理的適応に貢献している可能性が示唆された。この結果について高齢者支援の実践での自伝記憶の活用について提案された。

第1に、高齢者に対する具体的な支援方法として、積極的に自己の達成体験を想起し、意識化させるような働きかけ（言葉かけなど）が重要であること。

第2に、自伝的記憶が「心理的ストレングス」となる上で、プラスの効果をもつことが考えられる。そこで、援助者には、高齢者に対して情緒的サポートを受領できる他者を得られるような支援が求められる。

第3に、社会との関わりが希薄な高齢者への支援では、“よい思い出”を高齢者が有することを重要な内的資源の一つとして捉える視点が必要である。

本論文は、高齢者の自伝的記憶が心理的ストレングスに関わることを実証した研究論文であり、高齢者の「思い出」を彼らの豊かな生活を獲得するためのツールとしてそれらを活用した高齢者支援のあり方を提案した研究論文であり、その独創性と社会的価値においては大変評価される論文である。本研究が、今後の社会福祉現場における高齢者支援のあり方に一石を投じるものと確信する。

## II 論文審査の方法と結果

### 1 審査手続きと審査委員の構成

論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び課程博士論文審査委員会内規に基づき、大学院研究科委員会で承認議決された大学院博士後期課程担当の専任教員5名が審査を担当した。

5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長（主査）	今井 幸充	高齢者福祉、精神医学、認知症ケア
審査委員（副査）	大島 巖	精神保健福祉、プログラム評価
審査委員	中島 健一	認知症高齢者心理、高齢・障害者動作法
審査委員	児玉 桂子	高齢者居住環境整備手法研究、環境評価表
審査委員	斉藤 くるみ	英語学、脳神経言語学

### 2 審査の経過

提出された論文について5人の審査委員がそれぞれ個別に審査した「第1次審査評価表（個別審査表）」を提出し、それを基に主査が「第1次審査評価表（総括表）」を作成、2010年6月17日に行なわれた大学院社会福祉学研究科委員会に報告し、7月17日に口述試問を行なうことが承認された。その後、論文提出者には、第1次審査の個別評価及び総括評価で指摘された内容を主査が伝え、論文の加筆・修正を口述試問までに行なってくることを、それを踏まえて口述試問がなされることを伝える手続きが執られた。

### 3 審査の内容

#### <審査方法>

審査の方法は、第1次、第2次ともに「審査評価表」に5つの評価項目が設定されており、評価委員はその各々の項目について評価した。5つの評価項目とは、①研究課題の意義、②研究のオリジナリティ性、③先行研究のレビュー、④研究方法の論理性、実証性、⑤その他特記事項であり、その各々を踏まえた上で審査委員は総合評価を行うことになっている。第2次評価は、それに付け加えて、口述試問の評価と最終的な総合評価がなされ、主査は各審査委員の個別の総合評価を踏まえて、最終的に審査の可否を記載して、大学院社会福祉学研究科委員会に提案することになる。

#### <第1次審査>

評価に当たった5人の審査委員の評価内容は以下の通りである。

##### ① 研究課題の意義

本研究は、「高齢者の自伝的記憶が新たなストレングスとなる」の仮説をもとに、高齢者の持つ自伝的記憶の特徴、「心理的ストレングス」となる自伝的記憶の質とそれらの自伝的記憶と生活環境との関連を明らかにし、既存の高齢者ストレングスに新たに「自伝記憶」を加えようとする先駆的な研究であり、博士論文として5名の審査員が同様の評価を示した。



## ② 研究のオリジナリティ性

本研究は、「自伝的記憶」が高齢者の潜在的なストレスとなる可能性を探る先駆的な研究であり、4名の審査員ともにオリジナリティを認めた。ただ1名の審査員は、そのオリジナリティの見解について意見が示されたが、二次審査までにその審査者の意見を検討し、申請者が修正することとし、評価としては、4名の審査員の判定に従うこととした。

## ③ 先行研究のレビュー

2名の審査委員からレビューに関する意見が出された。1名は、「自伝的記憶の最新の研究が十分にレビューされていない」とし、もう1名の審査員から「・・・心理的適応についてのレビューが不足」との意見であった。この審査結果については、申請者に伝えた上で二次審査までに明確な回答を示し、また申請者が訂正する必要があると判断された場合は、再提出した上で評価することとした。

## ④ 研究方法の論理性、実証性

3名の審査員からの意見が示された。1名の審査員は、質的研究での分析が十分でないとの指摘があった。この指摘は、量的調査結果を確認する意味での質的調査が必要との2名の審査委員からの示唆があったことから、急遽調査を追加し、検討されたものであるが、この質的研究が本論文に必要不可欠か否かの議論が審査員の間にあった。その結果、量的調査の結果を確認することがインタビュー調査等で出来ていれば、考察で議論することとし、質的調査の項目は削除すること指導した。

また、本論文の調査結果から導かれた仮説の立証性について、審査員から幾つかの指摘があった。この点については、本文の考察での論点をもう少し明確にすることで解決されることから第2次審査までに修正することが求められた。

## <口述試問及び第2次審査>

口述試験では、第1次審査で各審査員が指摘した課題や修正点に対し、本人が再考し整理した回答を提出された資料に沿って一つ一つ説明がなされた。口述試験の内容に関して異論を唱える委員はなく、全てが合格と評価した。

その中で、ある委員は、本研究における概念構築の不十分さを指摘したが、この指摘は今後の長谷部氏が研究者として本研究を継続するために貴重なものであり、口述試験の評価を覆すものではなかった。

大方の審査員は、本研究の社会福祉学研究としての価値を評価した。また、本研究に示された「心理的ストレス」「自伝的記憶」に関する概念とその関連についての曖昧さが拭えないとする評価もあったが、評価者からこれらの課題解決の為今後の研究に期待するとのコメントが示された。以上から本論文は博士論文に値すると評価する。

審査委員会は上記の点を2010年9月16日の社会福祉学研究科研究委員会に提案し、了承・議決を得た。これを受けて、日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科は、2010年9月27日に長谷部雅美に「博士(社会福祉学)」の学位を授与することとした。



博士学位論文

内容の要旨および審査の結果の要旨【第16号】2010

---

2010年12月発行

日本社会事業大学

〒204-8555 東京都清瀬市竹丘 3-1-30

Tel : 042(496)3105 (大学院教務課)

Fax : 042(496)3101

---

中  
禮  
學